

2019 年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

地域共生の中でおこなう子どもの学習支援・体験ワークショップ事業

助成事業の取り組み内容と今後の展望

主催 一般社団法人 パーソナルサービス支援機構

事業実施期間 2019 年 4 月 1 日～2020 年 3 月 31 日



山丹助成

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

1, はじめに

当法人は2017年10月に鹿児島県鹿屋市にて団体設立し、2018年10月に法人格を取得。団体としてもまだまだ若く、そもそも代表の私は、出身は鹿児島ではなく、生まれも育ちも京都です。その京都にて、2010年から生活困窮者自立支援制度モデル事業（前身、パーソナルサポート・サービス・モデル事業）の業務に関わり、全国研修に参加したり、各地の先進的な取り組みを実施している地域への視察をおこなったり、従事者研修の講師などで各地域の実施課題を伺ってきましたが、その中でも一番気がかりだった地域が、ここ鹿児島県大隅地域だったのです。

2015年に生活困窮者自立支援法が制定された後は、京都府や府内各市から就労準備支援事業の部分を受託し活動していました。しかし、自分の目で見た鹿児島県大隅地域についての気がかりがいつまでも消えず、2017年3月に京都での任務に区切りをつけ、鹿児島県大隅地域への移住を決意しました。

おそらく、ここ鹿児島県大隅地域の課題と同じ様な地域は、きっと他にもあると思います。本来、法・制度というものは全国どこに住む方にも平等でなければなりません。しかし、地域によってはどうしても公平性が保てないこともあり、自治体独自で主体的に対応できることばかりではありません。

そこで私は、地域の中の住民や企業、支援機関など多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や専門分野の垣根を超えつながることで、誰もが平等に、自分らしく、活躍できる地域社会をともに創っていく仕組みを目指し、この事業の中身を全国に発信したく取り組んで参りました。

2, 事業背景・目的

ここ鹿児島県大隅地域は広大な土地ではありますが（神奈川県より広い）、過疎地域ということもあって公共交通機関はバスのみで、居住地によっては1日数本というダイヤだったり、バス停まで非常に遠かったり、移動手段として一人一台の自家用車等が必須となっています。要介護者や障がい者等であれば、制度による移送サービス等がありますが、それ以外の不登校児童やひきこもり状態の方にはそういったサービスはありません。経済的困窮世帯や一人親世帯等の家庭事情で支援を受けさせたくても送迎できない家庭は、結果的に当事者を家に放置せざるを得ないのです。大隅地域におけるひきこもり状態の方は約3,500人にのぼり（鹿児島県全体約8,000人）、予備軍の不登校児童含めほぼ手つかずの状態ですが、地域の独自課題なので、なかなか法・制度に乗せられない当事者を行政が直接サポートしきれないというのが現状です。家族からの相談があっても、当事者本人からの相談がなければ、さらに言うと、公的機関に来所してもらえなければ関わるできません。実際に、公的なひきこもり支援機関は鹿児島市内にしかないのも、高速道路を利用するかフェリーに乗らないと行けないので利用には非常にハードルが高く、不登校支援の公的な適応指導教室は全域で2箇所しかなく、送迎のできる家庭の5~6%の利用登録にとどまっている。

一般社団法人パーソナルサービス支援機構の本体事業は大きく分けて2つ。1つは、就労支援及び日常生活自立支援をおこなう「かのや自立就労サポートセンター」。もう1つは、小中学生のフリースクールと主に通信制高校に通う生徒の学習支援をおこなう「PSスクールかのや」。この2つの仕組みで、不登校・引きこもり支援から、学習サポートと就職・進学サポート、そして、就職定着や生涯にわたるスキルアップの応援という、切れ目のない新しい「パーソナルサービス(個を尊重したオーダーメイドの創造型サービス)」を実施しています。社会資源が乏しい地域では、一貫したサービスをおこなえる仕組みが必要となります。

また、この仕組みの基本的な部分は、所得制限や障がい認定等といった利用要件を設けていないというところですが、公的支援となると必ず利用要件がありますが、当法人は民間のサービスであるため利用の自由性があります。利用可能な公的支援を活用しつつ、足りない部分を送迎サービスを含めた民間のサービスで補います。また、個々に合わせてオーダーメイド支援ができるので、その都度、新たな仕組みを創造し、カスタマイズしていくことができます。これは、民間の強みです。

しかし、民間の大きな課題としては、「運営資金の確保」となってきます。今回の助成事業はこの地域ならではの支援の形の創出をおこなうことですが、一方で、すべて補助金等に頼らずとも、地域共生の中で運営資金を確保していくことで、他の過疎地域へのアピールになればと考えています。

3. 事業内容・実績

柱立て1「送迎・出前サービス」

(内容)

生活困窮家庭や一人親家庭の不登校児童を対象に、送迎および出前方式で学ぶ機会を提供。串良町（中部北寄り）にコミュニティハウスを設置し、居場所だけでなく地域との交流や地域住民を集めた寄り添い支援ボランティア講座なども開催。また、自立支援の一環として弓道体験も実施した。

コミュニティハウスやさしい釘（2019年6月～開所、3月は自粛）…週3～4日で120日開所

- ・地域探索活動…自分たちから地域のことを知ったり交流する機会に参加できる仕組み
- ・弓道体験…胆(心)育の一環として実施。郊外で暮らす不登校児童やひきこもりの方が、これから先、遠方に出かけることができるようになったり、自ら教習所に通えるように、自立心を身につけることを目指す取り組み
- ・プログラミング教室、イラストレーター教室…興味をひきやすい活動として開催
- ・寄り添い支援ボランティア講座…地域の方を対象に開催（全27回）

(実績)

・コミュニティハウス利用者 実人数67人（不登校32人・ひきこもり35人）年間のべ913人
当初予定は社用車1台を準備し、週2日程度の開催で、送迎4人、出前学習10人を計画していたが、スクールカウンセラー等からの個別相談事例が徐々に増えたため、送迎スタッフを増員して10人前後を送迎できるように対応した。また、コミュニティハウスとして年間で借り上げをおこなったため、週3～4日プラス弓道等のイベントも開催し、通所の習慣をつくることができた。

・寄り添い支援ボランティア講座の参加者 実人数21人 年間のべ216人

地域の方に不登校やひきこもりの現状を知っていただく機会づくりとともに、寄り添いボランティアのノウハウを学んでいただき、地域からも積極的に関わっていただく機会に結びつけることができた。

(成果)

不登校児童で生活習慣が整ってきたことを理由に当機構のフリースクールに通所できるようになった児童もいて、そこから復学が徐々にできるようになった児童や、受験や就職を目指せるようになった児童もいる。

また、ひきこもりの方で当機構の就労支援プログラムを利用した方もいて、就職活動を具体的に始めることができた方や、採用されてアルバイトを始めた方もいる。

(課題)

大隅地域の全域を送迎・訪問するには人員が不十分で、戸別訪問での相談のみにとどまっているの不登校児童やひきこもり状態の方が 66 人となった。また、人員不足及び資金不足のために今年度中に具体的な対策計画も立てられずに終わった。

ひきこもり状態の方については、送迎による就労支援プログラムの参加にはつながったものの、実際に就職を目指すとなると、この広大で通勤に利用できる公共交通機関の無い大隅地域においては自動車運転免許証と自動車の取得が求められる。生活困窮や生活保護を受けている家庭となると、資金的な課題や行政含め様々な調整が必要となる。

(まとめ)

送迎等サービスがあるからこそ支援につながったというケースについては、言い換えると、そのサービスがなければずっと孤立していたということになる。義務教育だけでなく、その後のひきこもり支援についても、大隅地域において送迎等のサービスの必要性が示されたと思われる。

ただし、今後、公的な送迎付きの支援の仕組みができたとしても、就職した後まで送迎を続けるのは困難である。自己資金で運転免許証の取得や自動車等を取得しなければならないが、家庭の事情によってそれが容易ではないケースもある。かといって、公的な制度からは、そういった金銭的な支援はできない。

現在、国の制度として動き出している、ひきこもり支援のアウトリーチ対応の中で、教習所への通送迎なども含めた地域の実情に沿った仕組みを行政に提言していき、新たな仕組みづくりをおこなっていく必要がある。

柱立て 2「ワークショップ・体験活動」

(内容)

不登校や生活困窮家庭などの子どもたちは様々な体験機会が少なく、自立に向けて必要な物事への興味や関心を持つ心やチャレンジする心などが欠如しており、様々なワークショップや体験活動を通じて、自分が好きと思えることや自分らしい生き方を探すきっかけを掴むことを目的として実施した。

また、子どもたちの健全な成長のためには、様々なことを学び、将来に向けて自分らしい生き方を見つけることのできる環境づくりが大切ですが、「食」を育むことなくして、「こころ」を育むことはできない。体調管理は薬や栄養剤に頼るのではなく、野菜の効用などを知り、常日頃意識して体内に摂り入れることを考えていると、1日1日の活力が変わってくる。それを、農業学習や調理実習を通じて学んだ。

(実績)

全体実参加 24 人

・ワークショップ (外部講師によるもの)

6/1 「心と体のセルフセッション (アロマ)」	参加 12 人
6/26 「皮からつくる本格点心」	参加 12 人
6/29 「和菓子づくり体験」	参加 14 人
7/8 「コミュニケーション講座 (暑中見舞いづくり)」	参加 10 人
7/21 「心と体のセルフセッション (体の仕組み)」	参加 11 人
8/3 「心と体のセルフセッション (部屋と心の整理)」	参加 10 人

8/5 「ヨガから始めるワークショップ」	参加 11 人
8/8 「食育特別プログラム（大隅の食）」	参加 14 人
8/4,11,9/8,15,10/14 「陶芸教室」	参加のべ 96 人
8/12 「マナー講座（和装体験と所作）」	参加 12 人
8/31 「レザークラフト（ペンケース）」	参加 14 人
9/23 「マナー講座（薩摩のお茶とお花）」	参加 12 人
10/6 「蕎麦打ち体験教室」	参加 20 人

・体験活動

農業学習、食育学習を毎月 2 回程度実施、各回 6～12 人。

(成果)

不登校の子どもたちは家でテレビや動画を観たりして情報量はそれなりにあり、大抵のことは「知ってる」「見たことある」と答えるのだが、実際その作業を目の前にすると、二の足を踏んで手が進まなかったり、自信なさげに周囲の子どものやっつてることを気にしたりしていた。しかし、次第に、子どもたちが本来持っている好奇心や探究心が芽生えだすと、徐々に笑顔で楽しんでくれるようになった。復学という形にこだわらず、「学校に行けばもっとこういったことができる」と知ってもらうことから始めることが、不登校支援の基本の一つだと考えさせられる取り組みであった。

参加者の感想を見ても、今まで不登校やひきこもりで他者との関わりをほとんど持ったことがないにもかかわらず、前向きな感想を多く見れたことは今後の展開をさらに働きかけていく裏付けにもなった。

農業学習や食育学習では、種を植え、苗を育て、苦勞と一緒に自分自身を強く育てていくことで、自分の将来をあきらめるのではなく、自分を育てるのも自分なのだということに気づくことができた。また、畑で収穫できた野菜を昼食として食べるだけでなく、地域でお世話になっている方々に届ける取り組みもおこなった。普段は支援されるばかりだが、働くことなどにつながる自立心に必要な「誰かに何かをしてあげる喜び」を感じることができ、農業学習だけでなく、日々の取り組み姿勢の変化にもつながった。

(課題)

この大隅地域の不登校児童やひきこもり状態の方の人数からすると今回の参加者は非常に少ないが、大がかりなイベントなどで大人数を対象にすればいいというわけではなく、参加時の様子の観察や、今後のオーダーメイドの支援につなげるためにも、少人数単位で繊細に取り組まなければならない。また、外部講師を活用し続けるということはその分の費用もかかる。そうになると、当機構だけの取り組みには限界もあり、複数地域での開催などを各地域の行政や教育機関、地域組織も巻き込み、お互いが主催・共催となって、幅広く取り組んでいくことが必要である。

柱立て 3 「シンポジウム開催」

(内容) テーマ「地域共生・共育・共働の社会をめざすシンポジウム」

「生きづらさ」や「障がい」を抱えた子どもや若者たちが頼れるものは法や制度だけなのか。地域の中には何も存在しないのか。そして、その子どもや若者たち自身は、ただ何か待つしかできないのか。個人やその家族だけが背負うのではなく、地域や地元企業も共に分かち合える仕組みを一緒に考える機会となることを目的に開催した。

〔日時〕 令和元年 10 月 20 日(日) 午後 1:00～5:00

〔会場〕 鹿児島県鹿屋市 中央公民館 集会室 (住所：鹿児島県鹿屋市北田町 11103)

【活動報告】 大倉一真 一般社団法人パーソナルサービス支援機構

【基調講演①】 肥後祥治氏・鹿児島大学教育学部障害児教育学科 教授

「発達障害や生きづらさを抱えた子どもたちの 新たな生活支援システムの可能性」

【基調講演②】 冠地 情氏・イトコサガシ代表

「様々な支援があるにもかかわらず なぜ当事者の生きづらさは変わらない？」

【パネルディスカッション】

「大隅地域における地域共生・共育・共働の社会とは」

コーディネーター 肥後祥治氏

パネリスト 藤原奈美氏・大隅くらし・しごとサポートセンター センター長 (生困事業)

井之上宏幸氏・鹿屋市街のにぎわいづくり協議会 会長 など (地域おこし)

川島康文氏・大隅家守舎 代表 など (地域おこし)

西岡 隆氏・厚生労働省年金局、大分県白杵市市政アドバイザー

コメンテーター 冠地 情氏

(実績)

遠くからは、熊本や宮崎、指宿からもご関心をもって参加いただき、全体 110 名の参加者となるシンポジウムとなりました。

(成果)

参加された方々が、今後、この大隅の地域で、「我がごと・丸ごととして社会の課題に向き合うには、自分たちに何ができるのか」を考えるきっかけとなり、「当機構と連携していきたい」との話をいただいたことも、このシンポジウムはその一石を投じられたと実感している。

(課題)

連携するにも、人員や資金不足という課題が出てくるが、同じ様な交通手段や過疎の問題を抱える地域で実践できるような仕組みを考える必要がある。

柱立て 4「臨時子育て支援の居場所&託児所開所(指宿市)」

(内容)

4 月末からの大型連休(10 日間)に、「世間は休みでもパートなど非正規雇用の私たちは働かざるをえない。しかし、子どもを預かってくれる学童や保育園も休みなので困っている」という声を聞き、急遽、WAM 事業の中で子どもの居場所と託児所を臨時で地域と連携して開所した。

子どもたちにとって、旅行も行けず、子ども同士の留守番で家にこもるとというのは、思い出づくりもできないし、他とは違うという理由でイジメにつながることもある。経済面だけでなく心の貧困の連鎖というのはこういったところからも始まるので、「楽しかった 10 日間」になるような取り組みをおこなった。

(実績)

4 月 27 日～5 月 6 日(10 日間)で 0 才児～小学校 3 年生までを対象に、のべ 109 人の参加があった。

(成果)

スタッフ以外に地域の保育士や看護師の方にも入っていただいたが、地元の高校生がボランテ

ィアとして実人数 45 人も協力していただけたことは、次世代に向けた地域共生社会をめざす上で大変喜ばしいことであった。

子どもたちからは、「いつもの学童より楽しかったし、たくさんの地域の人の温かさがいい思い出になった」「自分も大人になったら手伝う人になる」「いつも頑張ってくれるお母さんの負担を軽くできて良かった」など、嬉しくも寂しくもある親に気遣った言葉が聴かれた。

(課題)

この取り組みは臨時的なもので、行政の協力を今後どのように得ていくかが課題であったが、当初は必要性をあまり感じていなかった行政は利用者数やボランティア学生の人数に驚き、今後、同じ様な事態での積極的な協力を約束してくれた。実際に、新型コロナ騒動時には、行政への投げかけと同時に長期休暇の子どもの受入体制をとっていただけたので、意味ある活動になったと考えている。

4. 今後の展望

当機構の取り組みと照らし合わせて、公的な制度や仕組みに近いのは、障がい者の送迎付きのデイケアや就労移行支援等、生活困窮者自立支援法における子どもの学習支援や就労準備支援等、教育委員会の不登校支援や各自治体に設置された子ども・若者総合相談センター(ひきこもり地域支援センター)による支援となる。しかしこれらは、利用要件があったり、当事者が利用申請に来所しなければ支援が開始されなかったり、相談窓口の設置場所が県内で1箇所であったり、家族の送迎が必須であったり、、、と、本来平等であるはずの支援が地域によって受けづらかったり、支援の内容に格差が生じているのが現状である。

しかし、これほどこの地域にも起こる現象で、統一された制度で全国すべての地域でまかなえるということはなく、制度を補足する役割を地域や民間が担っていかなければならない。そのためにも、ここ大隅地域の課題に密着した活動を進め、その活動から見えてくる新たな課題に取り組んでいく必要がある。そして、この度の WAM 助成事業から見えた今後の方針を考察していきたい。

この事業のテーマにある「地域共生の中でおこなう」というのは、「まずは無いものをつくるのではなく、有るものを活用する」ということである。それは、人であったり、店であったり、ノウハウであったり、特産品であったり、、、つまり、「どこにでもあるもの」を生かすということである。シンポジウムの活動報告でもおこなったが、地域の中で理解者や協力者をつくり、その方々が持つ何かを使わせていただくということである。そのことで、不登校やひきこもりの当事者は、地域とのつながりができたことで、不安だった社会への第一歩を難なく踏み出すことができるようになる。大隅地域の課題は公共交通機関のダイヤ数やルートが乏しいということだから、増便や新ルートの増設をすればいいというわけではない。

「支援を受けに行くのに送迎ができないのであれば、送迎なく行ける場所につくればいい」

「支援する人員が不足しているなら、地域の方の得意なことを生かせばいい」

「支援する運営資金がないなら、地域や企業から貰える仕組みを創ればいい」

大隅地域は過疎地域ということもあり、空き家問題や企業や地域の担い手の高齢化問題は深刻化している。それに加え、不登校やひきこもり問題は、自治体の生活保護費の増加や税金の減収にもつながり、また、ネット社会のため外出の機会が減ると地元での消費の落ち込みによる地域経済悪化にもつながる。そういったことも踏まえて、今後の展望としては、当事者本人が少しずつでも外出しやすくなるように「近場の居場所づくり」を始める。その居場所は拠点的なハード(箱形)もあ

れば、就労体験先や中間的就労先、地域ボランティア先といった流動性のある居場所もある。とにかく、当事者本人が通いやすいというのが一番の条件になる。バリエーション多く、幾度とオーダーメイドできるように、草の根で地域の方や企業に対して訴えていくことが、持続可能な仕組みづくりにつながる。その延長に、行政からの補助金や企業等からの寄付につながることを期待し、次年度の活動に挑みたい。

【柱立て2 ワークショップ・体験活動】

アンケート集約 *参加者数 24 人 うちアンケート回収 24 枚

〔属性〕

性別	男性	16	24
	女性	8	
	未回答	0	

年代	10代	15	24
	20代	8	
	30代	1	
	未回答	0	

地域	鹿屋市	18	24
	垂水市	1	
	志布志市	1	
	曾於市	0	
	大崎町	1	
	肝付町	1	
	東串良町	2	
	南大隅町	0	
	錦江町	0	
	未回答	0	

所属	小学生	6	24
	中学生	4	
	高校生	8	
	無職	6	
	未回答	0	

Q, プログラムの内容全体についての評価をお教えてください

評価	とても満足	17	24
	満足	6	
	やや不満足	1	
	不満足	0	
	未回答	0	

- (理由)・リフレッシュできた ・普段体験できないことで楽しかった ・深く考えるいい経験だった
- ・自分の知らないことの多さにビックリした ・自分でもよくできたので嬉しかった
 - ・めずらしい体験で満足した ・リラックスできた 自分の性格に出会えることができた
 - ・もう少し頑張れば良かった ・丁寧に教えてくれた *同様の感想は省略

Q, 体験したり学んだ感想を家族や友人に話したいと思いますか？

自発性の変化を見る①	とても思う	11	24
	思う	12	
	聞かれば	1	
	思わない	0	
	未回答	0	

(理由)・姉も色々なことをしているので ・いつも気に掛けてくれるおばあちゃんに話してあげたい
 ・楽しかったから ・親族にも精神状態が不安定な人がいるので紹介してあげたい
 ・自分の個性を知ることができたから ・うまくできたから ・色々な効果が期待できるから
 ・「疲れた」が口癖の私が頑張れたから ・100円ショップの体験グッズとは全然違ったから
 ・普段体験できないことができたので ・親にも教えてあげたい *同様の感想は省略

Q, 次に何かチャレンジしてみたいと思いますか？

自発性の変化を見る②	とても思う	10	24
	思う	11	
	わからない	2	
	思わない	1	
	未回答	0	

(理由)・運動 ・もっと普段体験できないこと ・陶芸 ・お花 ・自分でやろうと思わないこと
 ・色々な人と話ししながら何かに取り組むこと ・視野を広げることができること
 ・料理 ・アクセサリーづくり ・水彩画 *同様の感想は省略

Q, その他、参加したことによる良い変化、感想、ご意見・ご要望は？

(自由記述)

- ・自分自身をみせられた ・知らない人たちとこんなに交流できたのは久しぶり
- ・嬉しかったです ・最近他のことに興味がわくようになった ・レクリエーションもしたい
- ・みんなと会えて良かったです ・次回も参加したいです ・よく眠れそう
- ・いろんな体験ができることが大事だと思った ・五感を通じた体験 ・自分も協力したい
- ・きつかったのもあった ・自分でもできたらいいです

【柱立て3 シンポジウム開催】

2019年10月20日(日)「地域共生・共育・共働の社会をめざすシンポジウム」

アンケート集約 *参加者数110人 うちアンケート回収82枚

〔属性〕

性別	男性	33	82
	女性	42	
	未回答	7	

年代	10代	1	82
	20代	5	
	30代	6	
	40代	29	
	50代	35	
	60代	3	
	70代～	3	
	未回答	0	

地域	鹿屋市	31	82
	鹿児島市	7	
	始良市	2	
	指宿市	3	
	垂水市	4	
	日置市	1	
	志布志市	4	
	曾於市	4	
	大崎町	4	
	肝付町	4	
	東串良町	5	
	南大隅町	3	
	錦江町	3	
	宮崎県	1	
	宮崎県都城市	2	
	宮崎県串間市	1	
	未回答	3	

所 属	行政機関	35	82
	支援団体	2	
	社会福祉法人	6	
	一般企業等	2	
	個人	33	
	未回答	4	

Q, 今回のシンポジウムについての評価をお教えてください

〔評 価〕

活動報告	とても満足	66	82
	満足	11	
	やや不満足	0	
	不満足	0	
	未回答	5	

基調講演その1	とても満足	67	82
	満足	13	
	やや不満足	0	
	不満足	0	
	未回答	2	

基調講演その2	とても満足	74	82
	満足	5	
	やや不満足	0	
	不満足	0	
	未回答	3	

パネルディスカッション	とても満足	67	82
	満足	5	
	やや不満足	0	
	不満足	0	
	未回答	10	

* 未回答は途中入退場のため評価できず

Q, 今回のシンポジウムの感想をお聞かせください

1. 自分のMAXで試行錯誤。自分自身も、これからもし誰かに寄り添う機会があれば意識したい。
2. 個人個人で生きるまでの苦しさは違うと思いますが、施設や季節の行事、またこのような機会でも、つながりを持って、日頃のささいなことから話せるようなことができればと思います。あつという間の時間でした。来て良かったです。
3. 心（身体どきどきしてます!）に響きました！ゆさぶられた感じ。できることを共創していく。さあ、これから動きますよ♪
4. とてもいい講演でした。何十年と大隅に足りなかったことを、京都から来られて取り組んでおられることに感動し、今まで気づけなかった共生・共育・共働のお話聞けて、良かったです。私にも何か出来ることを考えたいです。
5. 鹿屋で本日のようなシンポジウムが開かれ、その中に身を置けた事に感動した。様々な点が少しずつつながり、広がり、新しいものが生まれている予感がした。ありがとうございました。
6. 様々な立場・職種の方から話を聞き、視野が広がった気がします。話を聞いていて、まだそれぞれが孤立しているように感じたので、連携を深めていくことが必要だと思いました。
7. 最後の1時間がとても印象的でした。大倉さんのファシリテートが素晴らしかったです。冷たい会を勝手に想像していましたがとても熱くて参加してよかったです。
8. 鹿屋にしながら、このような素晴らしい活動をされてるなど、知らないことだらけでした。息子のコミュニケーション退化硬直を感じています。今日の話を参考に向き合っていきたいと思います。
9. たらいまわしにしないでつらさを共感していくこと、地域共生・共育・共働、そして大切な事、忘れないでいきたいと思います。鹿屋は可能性が大きいと思う。
10. 鹿屋の井之上さんと川島さんお二人の話が（実話）とても良かったです。わかりやすく、聞き易いので、大学の先生の話や冠地さんの話はとても素晴らしいものとは思いますが、全くの素人の私には少し難しかったです。
11. 冠地さんの力が入ったお話し、聞くほうとしては、マイクの音量を少し下げてもらおうと聞きやすかったかな。大きな声は耳には入っても心に沁みにくいかも。
12. 貴重なお話、本当に有難うございました。
13. シンポジウムでは、パネリストだけではなく参加者の意見のファシリテートもほしかった。段階があると思うけど。

14. 一言で言うと「カオス」という言葉が、いい意味でしっくりくる時間でした。一つのテーマをそれぞれの立場で見ると「こうとらえられるのか」と新たな発見をいただきました。しばらく消化の時間がかかりそうです。が、とても満足、楽しい学びになりました。
15. パーソナルサービス支援機構がされている社会資源の発見や、多職種連携による新しい物の創造に、これからの可能性を感じることができました。
16. 特に「IBRとCBRの連続体」が印象に残った。専門家や機関の役割を活かしながら、私自身としては地域づくりと地域おこしに関わる立場として、パーソナルサービス支援機構さんの地域資源の掘り起こしや活用、つなげる事を学び、私たちも続けていこうと感じた。
17. 「地域づくり」を考えることはありますが、そこにパーソナルサービス支援機構さんの視点がとても不足していたなあと考えました。サードプレイスづくり、何か役に立てないかなと思います。
18. 冠地さんの話が聞けて、とても良かったです。息子も大器晩成と信じて、時間、労力、お金をかけて見守っていきます。今日は参加してよかったと思っています。ありがとうございました。
19. サードプレイスの中途半端はよくない、切るべき所を切る、ここにとても共感しました。
20. 初めてこの業界でのシンポジウムに参加させて頂きました。私は脳性マヒに産まれましたが、普通の学校・有難い友人に恵まれて生活できています。その中で障害者の方が生活基盤の為の収入をどう作っていけるかに未だに答えが見えません。でも、今回の冠地さんのお話で私がやる気を持つという事、出来る事をやっていく努力が大切なのかと気づかされました。ありがとうございました。
21. 参加して良かったです、冠地さんに興味が湧きました。
22. 部屋の温度が低くとても寒かった。話をして下さる先生方が盛り上がりつつある中で、どう入っていけばよいのか分からなかった。置いていかれる感じがした。サードプレイスはむずかしいと感じた。
23. 最後に会場の声（参加者）をもう少し聞いてほしかったかな…。と思いました。
24. シンポジウムの構成がとても良かった。民間の団体が主体となったシンポジウムだと考えると秀逸。
25. とても参考になりました。ありがとうございました。
26. いろんな方の話をいろんな視点できけて面白かったです。なかでも自分に直結している冠地さんや肥後先生の話はとても共感できました。
27. 色々な人の基調講演とパネルディスカッションが混合・混在してわかりづらい点が多々ありました。専門的な言葉が多すぎるためわかりづらい、素人に分かるような講演をしてほしい。

28. この大隅の地で、このような共生を考える集まりを開催されることに敬意を表します。知らなかったことをいろいろ教わりました。ありがとうございました。
29. 時間が足りないと感じるほど、とてもよかったです。ありがとうございました。
30. 全員すごくためになる話をなされていた。来てよかった。特に冠地さんがはっきり言われているのが聞いていて、すがすがしかった。
31. 困難さを抱えた人に接すること、繋がりを作ることでの大切な要点を学ぶことができた。ありがとうございました。
32. 内容が解りやすく良く聴けました。
33. 冠地さんのお話は障害者と関わるのに本当に勉強になりました。診断を受けられていますが、逆に自分達の方が変わることが多すぎて冠地さんの方が普通に“あたりまえ”だと思えました。相手の心に寄り添い支援、サポートすることの大切さを改めて感じました。他の内容には少しズレを感じることもありました。冠地さんの話が全てだと思いました。
34. 生き辛い当事者のことが少し分かったような気がしました。退化硬直の予防、緩和は難しいけど、やれそうな気もします。ありがとうございました。
35. 知恵を心意気をいただきました。ありがとうございます。
36. 地元の様々な興味がある取り組みについて知ることができた。よい機会となりました。業務（患者さんを地域に繋ぐ等）にもいかしていきたいと思えます。ありがとうございました。
37. 全力で向き合う登壇者の日常がイメージできるようなシンポジウムでした。サードプレイスをどう作っていくか考えていかねばならない。
38. イイトコサガシの方の話は心に響きました。サードプレイスの意味は分かるのですが、具体的にイメージできなかつた。

Q、地域共生の観点で、あなたが今の社会に必要と思われるアイデアや、「こんな協力ができるよ」ということはございますか？

1. 今は思いつきませんが、今後考える必要性を感じた。
2. 地域共生という言葉をよく聞くようになりましたが、生きづらさを感じている方たちの声を生で聞く機会が、今後も定期的にあって、地域の方々が一緒になって考えて行動できる、地域全体に皆が生きやすい場所をつくっていったらと思います。冠地さん、1つ1つの言葉が響きました。

3. 私は、ボランティアで、施設に行ったり、何か悩んでいらっしゃる方がいらっしゃったら、何か出来ることを考えたいです。
4. 小さなことではありますが、まずは生き辛さを感じる人が人と関わる場をつくるのが大切だと感じています。私はサークルでそのような活動をしているので、一人でも多くの人が関わる機会をもてるよう呼び掛けをしたいです。
5. 生き辛さを抱えている若い人達の話聞いてあげたい。
6. いろいろな課題がありますが、知っていたらあの人に紹介できたのに〜と思いかたでした。鹿屋に資源がたくさんあるのにひきこもりの人やSOSができない人に支援できる参考になる会でした。参加して良かったです。
7. 話を聞いたり、寄り添うことはできるかと思います。
8. これまで地域共生というキーワードは私の中になく、今回のシンポジウムも少しレベルが高いかなと感じました。ですから、これからアンテナをはっていきたいと思います。
9. やはり”連携”という言葉を実践で本当に実現するために連携について真剣に考察することが出来る（助け合う、協働し合う、遅いを認める、役割を理解する）
10. 平成 28 年度から、公民権を活用した放課後の子ども達の居場所づくりを始めました。そこには、支援学級に通う児童も、外国人を親に持つ児童も、夏休みなどには、支援学級に通う児童も通います。毎日一緒に生活する内に多様性を受け入れられる人に発表している様に感じています。「学ぶ」「教えられる」より「幼い頃から一緒に過ごす」ことが理想だと考えます。
11. 地域の子どもたちの気持ちを聞きたい。なんとなく気持ちが沈んだり、モヤモヤしたりする子どもたちの気持ちを聞く大人になりたいなあとと思います。
12. 最近みつば会という障害者の親の会に入会したので、そのみつば会としても、子供と一緒に、地域の中での何か（今はわかりませんが）したいな…と思いました。
13. 大隅障害者親の会「みつばかい」を立ち上げました。また、お時間ありましたらゆっくり話したいと思います。
14. 外国人技能実習生と地域共生をどう繋げるのか。
15. 特に協力できる能力はないのですが、できる事は協力したいと思う方々も多くいらっしゃると思うので、簡単に見る事ができるHP or アプリで協力者をつのるなどしてはどうでしょう。

16. もうあるのかもしれませんが、人材ネットワーク？のようなものを作って、必要なところにピンポイントで支援が届けられる仕組みがあるといいな、と漠然と思っています。そういう橋渡しのような活動ができればと思っています。
17. 外部での活動（家ではやれない企画）家だけでは見えないものはたくさんあると思うし、ネットだけでは人間関係を上手く築く方法を知れないと思うから、競争化しないものの方がいいと思います。そうすれば、個人での出来ることを見つけられるかもしれないから、（やる気は本人が持ち込む）・人間関係外の場所の確保（サードプレイス）人間である以上、疲れるから外のベンチを多く置くのもいいと思います。それだけでも一人になれるから。
18. 高齢者・障害者・青少年への三位一体となった支援体制の構築。
19. 地域共生を大切にしている一人です。私たちが福祉施設を継続していく上ですごく勉強になりました。週2回程無料バスを買い物等に提供しています。地域と町の大型商店街、地域包括支援、とつなぐ協力ができるかなど。
20. 発達障害など“自分らしく”が難しい人に対する支援の仕方や接し方など学校で早くから学習することが大事だと考える。そのために教育者がもっと勉強してほしい。行政も力を入れるべき。（行き場をたくさん作ってほしい）←自分に合う場所を見つけるためには複数必要
21. 地域の開業助産師として、母と子（障害のある方）の母乳育児支援の必要な方にはボランティアでお手伝いしています。現在は第二日曜 13~16 時までですがその内のボランティアの枠を広げたいと思っています。協力できることがあればいいですね。
22. 退化硬直をしている自分を変えて知恵を出せるようにしたい。